

氏名(本籍)	黄貞允 (韓国)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博課第333号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	日帝強占期における新しい女性観と服装
論文審査委員	(委員長) 教授 岩崎雅美 教授 小路田泰直 教授 渡邊和行 教授 舘野和己

論文内容の要旨

朝鮮の新女性とは19世紀末、開化期に生まれ育ち、新教育を受けた女性を表す。新女性とは朝鮮において女性が家庭から社会に出て活動した第一世代である。本論文は1920～30年代の朝鮮における新しい女、すなわち新女性の新しい女性観と服装を明らかにし、その女性観と服装が持つ意義を明らかにすることを目的とする。

本論文は全6章で構成されており、各章の要約を以下に示す。

第1章序論では、本論文の目的と意義、関連する先行研究が取り上げられており、本論文の構成について述べられている。

第2章では、新女性の第一世代と呼ばれる人物の中で、その代表とされる人物4人—金元周(キム・ウォンジュ)、羅蕙錫(ナ・ヘソク)、尹心恵(ユン・シムドク)、金活蘭(キム・ファルラン)—の考え方、生涯にわたる服装について検討を行った。女性には教育の機会がほとんど与えられなかった時期に、金元周、羅蕙錫、尹心恵は日本留学、金活蘭はアメリカ留学を経験した。帰国後は社会で金元周は文学、羅蕙錫は文学と美術、尹心恵は音楽、金活蘭は教育という各分野で活躍した。しかし金活蘭以外の3人が新貞操観を主張し、自由恋愛をしたことは社会において受け入れられなかった。その結果、金元周は僧侶になり、羅蕙錫は夫に離婚されホームレスになって死亡し、尹心恵は愛人と情死という結末になった。金活蘭も男女平等を呼びかけたが、教育者だけに穏健で教育的な方法であり、他の3人とは異なっていた。しかし金活蘭は朝鮮総督府の内鮮一体政策に協力したことで、親日派とされ、彼女の教育分野における業績は現在まで正しい評価を受けられない状態である。

服装観においては尹心恵以外の3人は女性服の改良に関心を持っており、金元周と金活蘭は自分の

改良案を実際に製作して着用するなど、積極的に取り組んでいた。実際の服装においては羅蕙錫と尹心恵は当時のファッションリーダーであった。金元周と金活蘭もおしゃれな新女性と知られているが、質素と伝統服を重視する考えが実際の服装にも反映され、自分の改良案を取り入れた伝統服を着用していたことが明らかになった。

第3章では羅蕙錫が提案した改良服について検討を行った。羅の改良案を参考に図で改良服を示してみた結果、伝統服を衛生的で機能的な衣服にするための改良案であったことがわかった。また当時の他の改良案では言及されなかった色彩効果、身嗜み、経済性まで考えた提案であることがわかった。それに彼女の改良案はただ衣服の部分的改良に止まらず、衣服の改良には男女平等という精神が盛り込まれていたことが明らかになった。

第4章では金元周、羅蕙錫、金活蘭の改良案を含め、1920～30年代に提案された改良案を新聞と雑誌の記事を中心に分析した。朝鮮における伝統服の改良は日本の伝統服の改良と類似していると考えられるので、日本の明治時代における衣服改良運動と大正時代における服装改善運動と比較を行った。その結果、両国の類似点は洋服に接し始めるようになってから、不衛生であった伝統服の改良が始まったことで、相違点は朝鮮の女性服において下着を重視していること、白衣を色物に替えることであった。日本においては独自の考案服、男性用袴の着用から女性用の袴に改良されたことを挙げられる。また日本と朝鮮における伝統服の基本構造によって洋装化の過程が異なっていたことが明らかになった。

新教育を受けた世代が親になって、新しい考えで子供を教育していくようになり、従来の育児観から新しい育児観に変わりつつあった。それに伴い子供服にも変化が表れるようになった。

第5章ではこのような新しい育児観と子供服について検討した。植民地の朝鮮と支配国の日本と比較し、同時代における両国の育児観と子供服の類似点と相違点を探った。その結果、育児観における類似点は個人主義的育児観より国家主義的育児観が中心になっていたことである。しかしその根底には国の政治的背景によって、日本では富国強兵、朝鮮では日本からの独立という異なる意味を持っていたことが明らかになった。育児に直接関係していた女性の育児に対する考えはほとんどみられなかった。また育児観の相違が子供服に反映されたとはみられなかった。子供服において両国の類似点は衛生を基本にしていることである。相違点は日本では子供にも改良服が考案されたことであり、朝鮮では子供に合う色彩が勧められたことである。

第6章は結論で、第2章から第5章を要約し、今後に向けての課題を提示した。

論文審査の結果の要旨

過去に日本等に留学した女性の中に帰国後、種々の意味で改革的女性として生きた注目すべき女性達がいる。外国のいわば先進的な教育を受けた者がその後本国でいかなる生活をし、言論だけに止まらず日本と類似の服飾の改良にまで新しい提案を行った足跡は、服飾における比較文化としての研究意義があるばかりでなく、現在の大学関係者にとっても興味深い事柄である。朝鮮における改良服の様相は、服装が洋装化する前段階の試作ともいえるもので、服装史の大きな流れの中にあっては稍微細な部分になるが、思想が服装に反映する事例研究として、また日本の改良服との比較研究としてその成果は大いに期待できるものである。

本論文はおおよそ90年前に日本及びアメリカに留学した朝鮮女性の中から、「新しい女性」を表明し、かつ女性服や子ども服の改良を提案したいわば自由思想と共に伝統服飾に改革を挑んだ女性に関する分析と考察である。留学の時期はおおよそ1910年代から20年代で日本では大正期になり、日本が朝鮮半島を統治していた時代（1909～1945）である。この期の呼称について現在の韓国では、占領された側の国として「日帝強占期」という言い方がされている。日本やアメリカの新しい息吹を吸収した朝鮮女性らの帰国後の生き様を詳細に調査することから始まり、思想統制下の状況の中で新聞や雑誌の限られた生活関連記事から、女性の自立を促す内容や儒教的伝統的な生活スタイルを打破しようとした言論、さらに身近な衣服改良案や子供服改良案へと展開する流れが取り上げられ、詳細に考察されている。特に子どもの衣服改良案には、日本が明治以来の富国強兵的な思想下での案であるのに対して、朝鮮では日本支配からの脱却を織り込んだ意識が組み込まれている可能性を探るなど、やや資料不足があるものの服飾が単なる着る物に止まらず、社会の変革を促すものとして考察されていることは注目に値する。

全体は6章から構成されているが、主たる論は第2章から第5章である。

第2章「新しい女性観の出現」では、新女性の第一世代と呼ばれる人物の中で、金元周（キム・ウォンジュ）、羅蕙錫（ナ・ヘソク）、尹心恵（ユン・シムドク）、金活蘭（キム・ファルラン）の4名について彼女らの生涯と主軸となる考え方、さらに生涯にわたる服装について調査、分析が行われている。この時代の朝鮮の「新女性」の意味には、先端の憧れと先走りの軽蔑という両方の意味が存在する。女性に教育の機会がほとんど与えられなかった時代にキリスト教の家庭に育ったことから、4名の内、金元周、羅蕙錫、尹心恵は日本留学、金活蘭はアメリカ留学を実現している。帰国後はそれぞれ文学、美術、音楽、教育の各分野で活躍したにも関わらず、金活蘭以外の3名は新貞操観と自由恋愛が社会に受け入れられず、僧侶、ホームレス、情死という非通常の最後をむかえ、金活蘭は教育

者だけに穏健であったが、朝鮮総督府の内鮮一体政策に協力したことで親日派とされ、彼女の教育分野における業績は現在まで正しい評価を受けていないことを指摘している。新しい女性達はいずれも不幸な結末であるが、服装観においては女性服の改良に関心を持ち、自分自身でも改良服を製作して着用するなど、彼女らの現実的な行動を著者は丁寧に調査・分析している。中でも羅蕙錫と尹心恵は当時のファッションリーダーであったことや、金活蘭が当時としてはいち早く短髪にしたことなども取り上げ、その要因を新思想と外国旅行の影響等と関連させて考察している。最終的には特権的な外国との接触が、朝鮮・新女性の服飾改良の力になっていたことを解明している。

第3章「羅蕙錫の改良服」では改良服に関する資料が多い羅蕙錫を取り上げ、羅の主張と服装の提案を考察している。羅の改良案を参考に改良服の構造を分析した結果、伝統服を衛生的で機能的な衣服にするための改良案であったこと、また当時の他の改良案では言及されていない色彩効果、身嗜み、経済性まで考えた提案であったことを比較・考察している。それに彼女の改良案は衣服の部分的改良に止まらず、衣服の改良案の根底には男女平等の精神が盛り込まれていたことも解明している。

第4章「女性服の改良」では金元周、羅蕙錫、金活蘭の改良案を含め、1920～30年代に提案された改良案を新聞と雑誌の記事を中心に、女性服の全体を視野に入れて調査し、その改良の特色を解明している。朝鮮における伝統服の改良は日本の伝統服の改良と類似していることから、日本の明治時代における衣服改良運動と大正時代における服装改善運動を明らかにし、比較・考察している。その結果、両国の類似点は洋服を導入し始めてから、まず伝統服の不衛生に気付かされた事を指摘している。相違点は朝鮮の女性服においては下着を重視していること、白衣を色物に替えることに主眼があった。日本においては男性用袴をヒントにした裳袴の発明が行われた。また日本と朝鮮における伝統服の基本構造や着装の相違により洋装化の過程が異なることも解明している。

第5章「子供服の改良」では新しい育児観と子供服について考察している。植民地の朝鮮と支配国の日本とを比較し、同時代における両国の育児観と子供服の類似点と相違点を探っている。その結果、育児観における類似点は個人主義的育児観より国家主義的育児観が中心になっていたこと、そしてその根底には国の政治的背景により、日本では富国強兵、朝鮮では日本からの独立という異なる意味が存在していたことを明らかにしている。統治下であったために育児に直接関係していた女性達の考え方が資料として十分に得られていない欠点はあるものの、新しい視点である。子供服に対する両国の類似点は衛生を基本にしていることであり、相違点は日本では子供にも改良服が考案されたことであり、朝鮮では子供に合う色彩が提案されたことであると分析している。服飾が関係する論文では常に文献資料に加えて具体的な服飾の様相が求められる。また逆に服飾が先に提示された場合にはその服飾を解説する作業が必要であり、これには被服構成学なり、デザインなりの技術的な知識と技能を必要とする。そのような生活技術をも駆使して本論文はまとめられている。

以上第2、5章については学会誌、研究誌に公表済みである。第3・4章については審査中である。

第2章は「羅蕙錫の思想と服装」と題して『国際服飾学会誌』(No.27号 2005)、第5章は「近代韓国における子供服の改良について—新聞記事を中心に—」『人間文化研究科年報』(第20号 2004)及び「育児観と子供服の日韓比較—1920～1930年代を中心に—」『服飾文化学会誌』(Vol.7 No.1 2007)に掲載された。第3・4章は「A Study on the Improvement of the Women's Clothing—Focusing on the Comparison of Korea and Japan in the Modern ages—」と題して『韓国衣類学会誌』において審査中である。また投稿の前に3つの学会と1つの研究会で発表を行っている。